＜口腔の役割＞

タマムシ

背中に２本の赤い帯をまとい、全身が緑色の金属光沢を帯びたタマムシ（ヤマトタマムシ）はその美しい外観から古くは飛鳥時代に建立された法隆寺の玉虫厨子（たまむしのずし）の装飾に使用され、ほかには「箪笥（たんす）に入れると着物が増える」とも言われ、さらに縁起の良いことの前触れとして“吉兆虫”と呼ばれています。タマムシは英名で“ジュエルビートル”と呼ばれるなど、その美しくきらびやかな姿は洋の東西を問わず古来より珍重されてきました。

このタマムシの赤と緑は「補色」の関係、つまりコントラストが強い配色のため相方の色が引き立ち、その美しい姿につい見入ってしまいます。

色相をスペクトルの順序に環状に配列したものを色相環と言いますが、その色相環で向かい合う位置にある色同士を「補色」の関係にあるといいます。例えば「黄色と青紫」、「赤と青緑」は補色の関係にあります。補色は、ある色をしばらく見つめた後、白い紙や壁などに目を移動させた場合に残像として現れる色でもあります。

この「補色残像」は身近な商品にも取り入れられています。たとえば牛乳のパッケージに青が使われる理由のひとつに補色残像の黄色が白い牛乳を濃厚に見せるからです。

口腔外科に限らずいわゆる外科の手術の時には必ず血の赤い色を目にすることになります。しかも長時間、注意深く手術部位を見続けるため、血の赤い色が目に焼き付きます。そんな時、手術部位から目を転じると補色の緑の点や染みが目にちらつきます。このちらつきは集中力を途切れさせてしまいます。ですから手術室の壁や床はうすい緑色、そして手術着が青か緑の理由は患者さんの血の色の補色が手術中に目にちらつかないようにするためなのです。

ところで補色同士を備えた色鮮やかなこのタマムシは一見目立つことから外敵に見つかってしまわないのでしょうか。実はタマムシの羽の金属光沢は「構造色」と呼ばれ、光の入射角度で色が違って見えます。例をあげるとCDディスクやシャボン玉も同じ構造色。天敵である鳥はこの色が変化する羽を怖がるため、鳥が寄り付かないと言われます。これはもともと個体数の少ない生き物の外敵から身を守るためのまさに自然の神秘といえそうです。

桐生は山や川、緑に囲まれ多くの自然に恵まれています。普段からこの自然に目を向けてみてはどうでしょう。運が良ければいつの日か天然の美しいタマムシに遭遇できるかもしれません。

ヤマトタマムシ（桐生産）

色相環

手術室の壁、床は「うすい緑色」、手術着は「青」か「緑」です

【歯科口腔外科診療部長　今井　正之】